

北の医療を拓く

臨床研修病院紹介 第53回 小樽協会

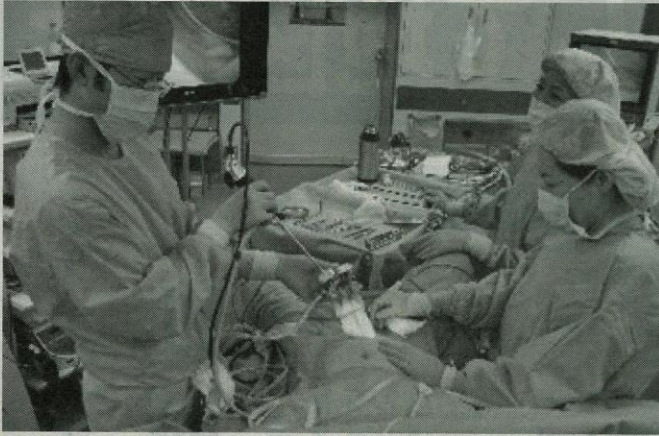
社会福祉法人北海道社会事業協会が運営する小樽協会病院（吉田秀明理事長、柿木滋夫院長・240床）は、後志圏の急性期医療を担う基幹病院の一つとして、歴史と伝統を重ねてきた。高い専門性を有し、地域完結型医療を目指して、地域の医療機関と協力関係を強めながら事業展開しており、募集定員3人の小所帯できめ細かい指導を受けられる点が特色だ。

小所帯できめ細かい指導

内科と外科で呼吸器疾患に力

JR北海道の快速電車を誇る同病院は、南小樽駅といった機器類も充実で札幌からおよそ35分の駅近くの現在地で96年に新築された。標榜科目12から港湾都市として栄え、市街地には往時の繁栄が残る近代建築や小樽運河があり、数々の映画やドラマの舞台となつている観光都市として全国的に有名だ。後志管内は22万人で、住民の高齢化が進む中、管内の急性期医療をカバーする役割を果たす。

呼吸器科は後志管内の中核病院として機能。呼吸器科とともに「呼吸器病センター」を設け、難治性の呼吸器疾患に内臓科・外科共同で治療に取り組む。肺がん手術数は年間50例を超える。産婦人科と小児科を標榜し、後志管内の地域周産期母子医療センターに認定されている。



竹藪 公洋 副院長
(プログラム責任者)



2015年度の当院の研修医は、1年次3人（基幹型2人、北大からのたすき掛け1人）、大病院は研修医が多くて華やかな一面があるものの、ともすれば医学士時代の見学の延長になってしまう側面もある。

当院は指導医と研修医の距離が近く、なんでもチャレンジできる環境だ。短期間でどんな成長し、われわれの仕事をサポートしてくれる頼もしい仲間と受け止めている。

柔軟な研修ローテーション

研修医1年目は、初期の救急は計3カ月の治療（必修）1カ月、精神科1カ月を経て、残り10カ月は自由に診療科を選択し、2カ月は自由診療科を体験する。希望により、産婦人科1カ月、軟に研修ローテーションに進む予定の専門診療科にじっくり挑戦できる。2年目は基本的に院内で



患者を対象に講演する機会も与えられる

1年次 杉浦 文康氏



旭川市出身で北大を卒業しました。在学中は医学部ポト部の活動に熱中して、初期臨床研修先をまったく考えていませんでした。6年生の夏休みに合同説明会に初めて参加し、小樽協会病院のブリスに立ち寄った際、竹藪副院長や先輩医師の熱意や人柄にひかれ、決断しました。

研修医が少ない環境なので、指導医の先生からマンツーマンでいろいろな任せてもらえるため、1年目から多くの経験を積むことができていく。

学ぶが、精神科は小樽市立病院、地域医療は東小樽病院でそれぞれ研修することになり、違う病院の医師やスタッフとの交流を通じて視野が広がっていく。

内科系の場合、呼吸器科では気管支や気管支、肺胸膜といった胸部疾患に

対し、動脈血採血や胸腔穿刺、胸腔内トロッカー

カテーテルや中心静脈カテーテルの挿入など、基本

にじっくり挑戦できる。管支鏡の実技や画像診断に加え、呼吸器外科や放

射線科とのチーム医療でも取り組む。

循環器科で心雑音のはじめ、上部・下部内視呼吸器を中心に乳腺や甲状腺、心エコー検査、負荷検査、超音波下生検、内科、手術後管理の知識や技術、患者や家族への対応

術、患者や家族への対応

消化器内科は、消化器

者のターミナルケアのあ

消化器内科は、消化器者のターミナルケアのあ

消化器内科は、消化器者のターミナルケアのあ

消化器内科は、消化器者のターミナルケアのあ

できます。その分、手技や知識を短期間で習得できるので、やりがいを感じるでしょう。先輩との距離も近く、困った時にすぐ相談できるアットホームな雰囲気も肌に合っています。看護師、薬剤師、臨床工学技士など、多岐にわたる職種の方々と一緒に働くことも多く、日々勉強です。

一方、小樽は札幌から近いので公私ともに便利な立地です。夏休みには道北を自転車ツーリングしました。

いろいろな専門に進むか思案中ですが、プライマリケアにも対応できる医師になりたいと思っています。

患児への初期治療なども学ぶ。救急では術中麻酔や救急外来で研修する。

患児への初期治療なども学ぶ。救急では術中麻酔や救急外来で研修する。

患児への初期治療なども学ぶ。救急では術中麻酔や救急外来で研修する。

患児への初期治療なども学ぶ。救急では術中麻酔や救急外来で研修する。

患児への初期治療なども学ぶ。救急では術中麻酔や救急外来で研修する。

患児への初期治療なども学ぶ。救急では術中麻酔や救急外来で研修する。